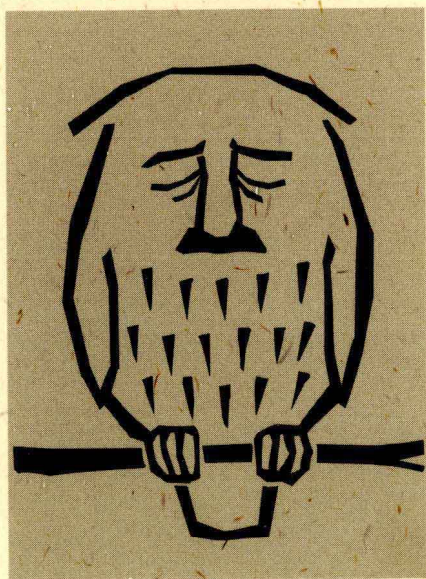


漱石異説『坊っちゃん』見落^{みおとみ}
『漱石研究』落選集

木村直人



漱石異説『坊つちやん』見落^{みおとし}
『漱石研究』落選集

木村直人

著者略歴

木村直人（きむら なおと）

1948年 群馬県伊勢崎市に生まれる。

1965年 群馬県立前橋高校にて亀島貞夫に出会い、師事。
亀島貞夫研究を生涯の課題と決める。

1976年 武蔵大学大学院修士課程修了（経済学専攻）。

現在 神奈川県立湘南高校通信制勤務。

著述関係 亀島貞夫研究誌「文化同盟」個人発行。

『逃亡者』（筆名・山影冬彦、自費出版）

『契約結婚』（筆名・山影冬彦、武蔵野書房）

『アダム・スミスの娘たち』（龍溪書舎）一部共訳

『漱石異説二題 ―「坊ちゃん」抱腹・「道草」徘徊―』（彩流社）

『漱石異説『こゝろ』反証』（武蔵野書房）

現住所 〒251-0004 神奈川県藤沢市藤が岡3の6の19

電話（0466）27-5868

漱石異説『坊ちゃん』見落

みおとし

『漱石研究』落選集

一九九八年七月一〇日 初版第一刷発行

著者 木村直人

発行者 福田信夫

発行者 武蔵野書房

国分寺市本多二一九一八／郵便番号一八五〇〇二一
電話〇四二二三六〇二〇一

FAX〇四二二三五八八六二

郵便振替〇〇一八〇一八一九一二九

版下作成／いっこう写植

印刷／ミツワ 製本／三水舎

装幀／杉澤清司

不良本は送料小社負担でお取り替えいたします。

本体価格二、〇〇〇円（税別）

漱石異説『坊つちやん』見落^{みおとし}

——『漱石研究』落選集——

へ目 次へ

まえがき	4
第一章 『坊っちゃん』と『田舎源氏』	11
第二章 『坊っちゃん』と多田の満仲	33
第三章 『坊っちゃん』と子規	54
第四章 『坊っちゃん』と「貴種」	75
第五章 『坊っちゃん』と平岡説（一）	95
第六章 『坊っちゃん』と平岡説（二）	123
第七章 『坊っちゃん』と平岡説以後	153
あとがき	182

まえがき——落ち二題

その一、多田の満仲・只の饅頭拾遺

以前、彩流社から出した『漱石異説二題——「坊っちゃん」抱腹・「道草」徘徊——』では、坊っちゃんが祖先と仰ぐ「多田の満仲」に関して、この歴史上の人物が菓子子の「只の饅頭」との語呂合わせとなっているという解釈を示して、それを『坊っちゃん』論の主要な論点においた。その折、この語呂合わせ解釈の歴史的検証として川柳をはじめ様々なものを列挙してみたが、調査不行き届きの故、落ちがあつた。「多田の満仲・只の饅頭拾遺」とでも標して、その落ちをここで補つておく。出典はいずれも明治書院刊『狂歌大観』による。

竹内御門跡へまんちうを進上ありて

西方行者

冬の日にたれはまいると津の国の たゝの満仲御めかけられよ

御返し

不恐綿心綉口娑波田分遊人 御返報

桑門

津の国のたゝのまんちうみそめては 世の味のみなもとそしる

〔『策伝和尚送答控』（『狂歌大観』参考篇七九頁）〕

戌の霜月朔日長嘯公へ饅頭にそへて

策伝

津の国のたゝにもあらぬまんちうや 菟角姿は美女御前哉

御返し

長嘯

案すれは佐藤殿ともいひつへし たゝのまんちうならぬうまさを

〔『策伝和尚送答控』（『狂歌大観』参考篇八七頁）〕

或人の所にて土蜘蛛の能をしけるに頼光になりし人いかゝし侍ける太刀
ぬきさまにふところよりまんちうをおとし舞台にてふみわりたれば中
よりあん出何とも見ぐるしく興さめけるにこれに歌よめとありければ
頼光の太刀と一度にはしりいづる こやまんちうのあんのうちもの

〔『卜養狂歌拾遺』（『狂歌大観』本篇三四一頁）〕

その二、落選報告

漱石は俳句は作ったが、川柳・狂歌は作らなかった。だが、『坊っちゃん』は、同期の『草枕』が俳句的雰囲気の漂う作品であるのに対比して言えば、川柳・狂歌に通ずる茶化した世界を構成するものと私は解釈している。ところが、世に活字として流布する漱石評者の『坊っちゃん』解釈をみると、どうやら『坊っちゃん』を深刻・真面目な作品と解釈する点で一致しているようである。この傾向は、他の漱石作品論において、いわゆる「暗い漱石」とか、「漱石の低音部」とかの議論が行なわれていることがまず土台にあつて、この議論を『坊っちゃん』解釈にまで押し広めようとしたことによるのではないかと思われる。確かにこの議論は漱石作品論としては実に魅力的だが、こと『坊っちゃん』に関しては事実にあわないのではないか。そうした思いから、『坊っちゃん』に関する生真面目解釈に改めて生真面目に異を唱えようとしたのが本書である。

生真面目にであらうがなからうが、素人が時流に異を唱えることの難儀なのは、わきまえている。早い話、相手にされずに終わるのが落ちといえよう。事実、本書を構成する各稿のほとんどは、小森陽一・石原千秋編集の漱石研究誌『漱石研究』（翰林書房刊）に投稿して、全

て落選したものである。即ち、本書の第一章から第五章までがそれである。第六章・第七章は、落選が決まった第五章の続章をなすものなので、改めて投稿するまでもなく結果は確定しているものと判断して、投稿にかかる手間暇を省いた。

見比べてみればなるほど、生真面目な高品質の論文が毎号ひしめきあう『漱石研究』では、本書を構成する『坊っちゃん』諸稿が没になるのも致し方ない。ただし、『漱石研究』から全く相手にされなかったからといって、私は私の『坊っちゃん』解釈が取り立てて意味のないものとは思わない。意味は大いにあるものと思っている。その私の解釈が没になったのは、それを一つの解釈として世に紹介するだけの度量が『漱石研究』編集者になかったただけの話と割り切っている。とはいえ、実際のところ、没になった方の質が粗悪だったのか、没にした方に論を見る明がなかったのか、その辺の判断については、当事者外の本書の読者に委ねる外ない。その判定の要請もあつて、本書の副題に『漱石研究』落選集』とありていに銘打った次第である。なお、各落選稿については、本書に収録するにあたって、もちろん投稿した折と大意は変えていないが、重複回避や記述の繋がり具合等の観点から若干の修正は施してある。

思うに、そもそも悉く落ちた投稿のいずれもが、私自身をも含めた『坊っちゃん』評者の

見落を指摘する点で共通していたことは、何かの縁で面白い。見落指摘だから落選したというふうに、言葉に遊んで捉えることができる。本書がまた言葉の遊びに大きく論点を割いていることでもあり、そうした縁から、本書の表題を「漱石異説『坊つちやん』見落」とし、既に副題として内定していた『漱石研究』落選集」と合わせて、表題・副題を『漱石異説『坊つちやん』見落——『漱石研究』落選集』とする所以である。

この際、ちなみに露わにしておけば、拙著『漱石異説二題』の『坊つちやん』抱腹稿も、実は柄谷行人等が選考委員をやっている雑誌『群像』の何とか新人賞に応募して箸にも棒にもかからずに落選したという経緯がある。いずれにしても、私の『坊つちやん』見落解釈は、大方の玄人からは相手にされない状況にあるという外ない。状況は厳しい。その一方で、抛り所はある。何といっても、一介の行商人たる相沢忠洋がそれまでの日本古代史の常識を覆す岩宿遺跡の発見を行なった事例は、私の支えとなっている。この事例から、玄人の方が玄人であるが故に見えなくなっている盲点といったものが、この世には存在するということが判る。そこを衝くのが、素人の楽しみともいえる。怪我の功名といったことは、また別の事柄に属す。裸の王様という寓話に近い。私は本書を準備するにあたって、自分の感じた通りのことを他に憚らずに論理化して記す、この素人の楽しみを、満喫した。それだけ

で、精神衛生上私は報われたと思う。

もともと認知の問題は、時代や相手との関わりなので、時の運不運や相手の良し悪しに左右される。未だに江藤淳が権威として罷り通っているような状況では、当面、私の『坊つちやん』見落解釈が認知される可能性はないと心得ている。気長に現下の漱石研究の潮流が一変するのを待つ外あるまい。それでも駄目なら、ただそれまでのことである。

なお、漱石からの引用に際しては、岩波・新書判『漱石全集』全三十五巻本に拠ったが、『漱石研究』に投稿する都合上、旧字体等を改めたため、原文通りの表記にはなっていない場合があることを断わっておく。

第一章 『坊っちゃん』と『田舎源氏』

これでも元は旗本…清和源氏で…土百姓とは生れからして違うんだ

百姓も元は清和の流れなり

「百姓も元は清和の流れなり」とは、川柳である。と同時に、川柳の形式を採った謎遊びでもある。謎遊びとしては、「考え物」に分類される。つまり、「百姓も元は清和の流れなり」とは何かを考えてみよという問いで、答えは『田舎源氏』とある。江戸文学を多少とも習った覚えのある人ならば、なるほど、面白い謎遊びだと感心するかもしれない。しかし、この川柳はただそれだけのものではない。漱石の『坊っちゃん』と少なからず関わりがありそうに思える。

『坊っちゃん』と言えば、読んでとにかく面白い。『坊っちゃん』は抱腹絶倒せずには読め

ないというのが私の持論だが、その『坊っちゃん』の面白さはどこからくるか。坊っちゃんをはじめ赤シャツ・山嵐といった登場人物の造形の妙味や筋の展開の軽快さなどに因っているにちがいない。と同時にそれは、『吾輩は猫である』と同様、作品全体に言葉の遊びが目立つことがその一因となつていよう。正義漢を以て任ずる主人公の坊っちゃんからして実に滑稽そのものである。

その端的な例は、例のバッタ事件・呐喊事件の際に生徒の悪戯に翻弄された坊っちゃんが内心発した「多田の満仲の後裔だ」述懐であろう。実際、そこには坊っちゃん本人には無自覚なままに作者によって「多田の満仲」＝只の饅頭という語呂合わせが仕掛けられていて、ここに作品を理解するための言葉の鍵が隠されている。この言葉の遊びを鍵として活用すれば、主人公が只の饅頭の「後裔」であることを誇つてなおかつそのことに無自覚であるという作品の喜劇的性格が歴然となる。主人公の坊っちゃんとは、実は自覚なき道化だということになる。『坊っちゃん』の面白さは、そこに基づくものと私は考える。

ところが、漱石研究者による最近の『坊っちゃん』評をみると、『坊っちゃん』は悲劇として扱わずに論ずる価値なしといった想念にでも支配されているかの如くで、僅かな例外はあるにしても殆どがこうした喜劇的論点を見落としている。そもそも、率直に『坊っちゃん』

全体が面白い作品であることを認め、その『坊つちやん』の面白さはどこからくるかを明らかにすることが『坊つちやん』論の課題であるといった問題意識を抱くことがないようなのである。このことは、拙著『漱石異説二題——「坊つちやん」抱腹・「道草」徘徊——』（彩流社）においてすでに指摘しておいた事柄であった。

とはいえ、その拙著においては私自身も、「多田の満仲」＝只の饅頭という語呂合わせにのみ気をとられて、同じ言葉の遊びの面で見落としてしまった重要な事柄があった。言葉の遊びを扱いながら、肝心の突っ込みが足りなかった。気づいたのが拙著出版後だったので、不足分を今になって補充しなければならぬ仕儀となった。事後補充では体裁が悪いが、見落としては、何にせよ、気づいたならば直ちに改めるに如くはなしと考える。

その私が見落としていた重要事項というのが、冒頭に紹介した「百姓も元は清和の流れなり」という川柳に示された道理だったのである。では、実際この川柳は漱石の『坊つちやん』と具体的にどういうふうに関わりがあるというのであろうか。

念のためにここで問題となる坊つちやんの述懐の箇所を引いておく。『坊つちやん』の「四」では有名なバツタ事件・呐喊事件が起り、坊つちやんは生徒の悪戯に振り回される。その際、坊つちやんは自分の氏素性を自負して述懐し、次のような気焰をあげる。

宿直をして鼻垂れ小僧にからかわれて、手のつけようがなくって、仕方がないから泣き寝入りにしたと思われちゃ一生の名折れだ。これでも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違うんだ。

この坊つちやんの述懐、殊に「これでも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違うんだ」という箇所に対して、「百姓も元は清和の流れなり」という川柳の道理を対置してみよう。すると、坊つちやんの述懐は、この川柳の道理によって、いかにも川柳風に軽くあしらわれて引つ繰り返されてしまうように思われる。その様は後に詳述するとして、とにかく先年私が前掲の拙著で坊つちやんの無自覚的な滑稽を論じた時には、同じ引用箇所を考察の対象としながらも、「多田の満仲」＝只の饅頭という語呂合わせ仕掛けの解明とその意義づけとに手一杯で、この川柳的道理の世界にまでは思考が及ばなかった。それが漸く考え及ぶようになったので、坊つちやんのこの「土百姓」蔑視発言について、すでに論じてある「多田の満仲の後裔だ」部分は除いて、その前後にあつて私が論じそこなつた部分に焦点を絞って、改めて取り上げようというわけである。要するに、「これでも元は旗本……清和源氏で……こんな土百姓とは生れからして違うんだ」と「百姓も元は清和の流れなり」との対置ということになる。